

## 信仰は生活であるといふこと

「信仰は生活である。」ということがよく言われる。

たしかに宗教は人間の一番深い生活を願求し、それを成就しようとする営みである。それに対して異論はないが、しかしこの「信仰は生活である」という言葉の中には、非常に心を用うべきものがあるようである。以下これについて考えてゆきたい。

街には、三百六十五日、寺参りを仕事にしている老人がある。にもかかわらず、「悪人でございます」というのはお説教の時だけで、家に帰れば、悪人どころか、人を裁き、人を苦しめる大将であるような場合に、家のものに言わせると、宗教は生活であるはずだ、うちの婆さんの念仏はなっていない、と言う。もつとものことである。

後生の問題といえば、この世の問題ではないことにし、生死の一大事といえば、死んだ先のことだけだと考える。悪人正機といえば、悪人でもない者がこの身このままと言い、邪慳をつけば、これがやめられるようなら他力はいらぬという。嫁いじめの評判者の老婆があつて、誰かゞそれに向かつて忠告すると、こういう悪人がお目あてだとされる。あわれ超世無上の本願も、勝手な言いわけの道具となる。念仏は生活でなければならぬ。

表では「無我の、報謝の」と、美しいものによつて装われつつ、裏では営利会社よりも醜いものがものを言い、聖なるものによつて人間の醜いものを満たそうとする。1 そうしたことの数々を見ねばならぬことは悲しいことである。たしかに宗教は身をもつて生活される生きた事実でなくてはならない。

しかし「信仰は生活である」ということが、あまりに素朴的に考えられて来ると、そこにもまた考えなくてはならぬ問題が生れて来る。

宗教は生活実践ではあるが、生活実践が必ずしも真実の宗教ではない、と私は言う。何故であるか。人間は必ず目的をもつて動くものである、しかるに、ただ単に働くこと、動くことの上に、ただちに真実を肯定するということは、人間の深い自覚への障碍となるが故である。

ここにある程度に仏教を聞いた人がある。その男が、仏教は生活であるとして、聞法に時を費す人を嘲笑して、日々営々としてはたらいっている。しかるに、その男がもつて生活だと肯定しているものをよくみつむれば、彼は順境の波に乗つて貪欲の心のままに金儲けに奔走しているに過ぎない。彼は彼の腹の底に潜む貪欲の悪魔を見出しはけない。彼の生活とは彼個人の成功のことに外ならない。「宗教は生活である」と彼が言えば言うほど変なものになる。

世には、「天職と考えて」という言葉がある。教育が天職であるとか、医師が天職であるとか言われる場合である。まことに言葉の如くであれば結構であるが、果して言葉の如くなつていようか、学校の校長である場合には相当の人であつたもの

が、一度、恩給を取って引退した場合に、そこに裸にしても立派な人が立っているであろうか。教育者であるより先に本当の人になれ、というのが私の持言であるが、教師ではあつても人ではない、その時、果して本当の教師であろうか。

人とは自覚である。その内に充実した内莊嚴のことである。

手軽く実践と外に跳る前に、内に限りなく培うこと。利他の前に自利、教人信の前に自信、教える人である前に習う人、たとえ五十歳になつても児童の如く求める人でなくてはならない。

釈尊の仏陀としての人格は、仏像が示すが如く、万徳円備の絶対人格ではあるが、その内心には一人の童子があつて生きている。すなわち華嚴の善財童子がそれである。合掌して五十三人の善知識より善知識のもとに走る善財童子こそは、釈尊の人格のうちに生きる永遠の童魂でなければならぬ。

「開三顯一」とて、法一機一、一因一果の大乗を顯わさんとする法華経において、これを解釈せられた聖徳太子の義疏に、「如是我聞」を説いて「外道の我自然に知る之過に異なることを表はす」と仰せられた。

外道の善は、自然に知ることを尊び、仏法は真実の教法に値い、それを聞信して成就した大でなければこれを問題にしない。限りなく真実に文化を進展せしめてゆく不退転の世界の生れる理由がそこにある。

同一の教法、その教法が顯す同一の行、同一の大道を受け取る同一の信、それから2おこる同一の証果、そこにのみ、法一機一、一因一果の一乗海、大乘の世界が開けるのである。

かかる一の世界は、人間が持つて生れた、いわゆる生得の機の雑善によつて成就するのではない。生得の機に立つことを小我といい、自力と言われるのである。そこには相對善しか生れては来ない。この相對善の世界では、十法百機、千因万果、ついに、一の世界を離れて、流轉輪廻より外ないであろう。

かかる世界にとどまりつつ、信仰は生活であるなどとうそぶく時、自損損他より外にないであろう。

時にこうした人がある。昨日今日仏法を聞きはじめただけの人にして、あるいは長年に渡つていい加減に聞いた人にして、聞くみ法をみな自分の過去の生活に持つてゆき、十年前の自分のあのやり方は教えの通りであつた、あの事件の処理の仕方が先生の言う通りであつた。僕の信念と共鳴するところが多いと、一一を取つて自分の生活の正しかつたことの証明にする人である。この人には全否定ということがない。藁シビ位な善を並べて、常に肯定から肯定へと自分を肯定してゆく。その度ごとに自己修正を加えつつ、いまだ一度も道にそむかぬとし、それに宗教を結びつけてゆく人がある。こうした人の心の底に一貫するものは名利心であつて、本願の大信ではない。かくの如き人を十九願の世界の人というのである、聖道自力のぬけない人、心の底に我執があるのに、光に遇わずして見えぬ人である。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて、そらごとたわごと、真実あることなきに、ただ念仏のみぞ真実にておはします。」

こうした聖人の大信心こそは、人間の雑毒虚仮の善悪のすべてが、如来久遠の真実によつて全否定せられて、全一なる大善が、人格の本質として回向せられた、自覚の極限を示されたものである。

我らは、いささかの善の実行を鼻にかけた人よりも、悪人と目覚めて大地に合掌して念仏する人の方に、ゆかしき光とほのかなる尊き香を拝むのは、久遠の真実が、無私の信火を通して、その人の上に全的に光るがゆえであろう。

こうした真実の念仏行者は、宗教は生活であるとの言葉の前には沈黙して深い反省や懺悔を持つであろう。そして、内に悪を知れば知るだけ、衆生の業障を救いたもう大悲の深重を仰ぎはするが、自らの生活が生きているなどとはうぬぼれないであろう。宗教は生活でなければならぬ。しかし真実に自己を知る限り、我は真実の生活であるとは言えない。聖人の

「まことに知んぬ。悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚之数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまず、恥づ可し傷むべし矣。」

との御悲歎は、決して、宗教は生活である、しかし我はその宗教の生活であるというが如く、高上りした者の声ではない。けれども、それは如来の大悲を疑うのではない。あるがままの貪瞋のうちに深く、大悲本願はくい入つて、撰取廻向の真心は念仏となつて流出していたものである。されば、聖人は、

「慶しき哉、心を弘誓之仏地に樹て、念を難思之法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ、慶喜彌至り、至孝彌重し。」

と嘆じられた。

如来の本願は衆生の今の一心の上に回向せられている。この如来回向の一心こそ、衆生を根本から生かして下さる大悲の真実である。この大悲の真実は、火の炭におこりつきたるが如く、衆生を正定聚の菩薩たらしめるものである。宗教は生活であるということとは、宗教は如来廻向の生活であるということである。そこに信知せられるものは、「如来の矜哀」であり「良に師教の恩厚」である。「慶喜彌至り、至孝彌重し。」永遠に報恩謝徳の生活を念仏のうちに成就させて頂く。大地に五体投地して、久遠の真実一乗に全我を托して生きること、これ宗教生活のすべてである。誤つて人間の虚仮の雑善の筏に乗つて、安価なる自己肯定の自力に安住するなかれ。必ず、波浪、汝を呑まん。